
ニュース・ペッパー

紅葉紅葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニユース・ペッパー

【Nコード】

N8111X

【作者名】

紅葉紅葉

【あらすじ】

個性を昇華させ、能力にすることが出来る時代。

主人公の坂崎廉は、ブラックユーモアをこよなく愛する高二生。

そんな彼が遊びで作った部活「辛口情報評会」には、何故か美少女で、残念で、そして凄い「能力」を持つ人達が集まっていった…。

残念なりに凄いことをやりまくる彼らに、果たして明るい未来はあるのだろうか……多分ない。

「あの、すみません部活作りました」「いいよ」「え」

即答とはこのことか。

我が担任の赤坂美月は、俺を強烈に睨んでいる。

今の文章の何が悪かったのか？つーかまだ話し終わってないんだけど。

「……なんか悪いことしました？」

『当たり前だ。坂崎、お前私の眠りを邪魔しただろ。あと少しで夢の世界に入れたものを、現実逃避が出来たものを！』

……教師かこいつ！？

確かに首にはよれよれの古ぼけたアイマスクがかかっている。真っ黒だったのが、油はねも若干ある。揚げ物ってアイマスクつけながらやるもんだっけな？

そして、どんだけ使ったらこんなにアイマスクがボロボロになって擦り切れるんだか、知りたいな。

「で、クラブなんですけど」「そこに用紙、あつちに私の印鑑、ここにペン。顧問は私でいいから……ふぁ……眠い……めんどくさいつたりやありません……」

言ってる事がアバウト過ぎて何も分からなかった……

しかも我が担任は他人の迷惑も考えずにそんなことを言い放ち、よれよれのアイマスクを目にセット。

このまま寝られたら困る。何も分からん！

「全然分かりませんよ!」

「……」

……まさか。

「……赤坂先生?」

「……すぴー……すぴー……」

遅かったか……、赤坂美月完全に沈黙しましたハイ。結構可愛いな
って思える自分が今恨めしいですハイ。

……しかしこんな廃人みたいな人には、眠気が絶えない理由が
ちゃんとある。

ずばり!

《頭の使いすぎ》
らしい……!

あの人は、

《何もかもめんどくさい》

のが個性で、その個性を強化しまくった揚句の果てが

《動かずに全て終わらせてしまえばいい》

になり、超能力が使えるようになったんだとか。

人間は個性が大事で、個性が最大限まで行くと、能力として開花、
その類では誰も勝てなくなるくらい強くなる。

俺には認めたくない個性があり、認めたくない能力もある。ただ、
持て余してるのもめんどくさいから、それが使えそうな部活を作ろ
うとしたのだ。

だけど……

こんなにあっさりで良いんだろうか、職員室のくせに他に誰もいないし。

諦めかけていたとき、

不意に風が吹いた。

風、まさしく風だった。

しかもかなりの強風。

プリントは飛び、パソコンの画面は揺れ、そしてペンも転がっていく。だがここは職員室、強風なぞ絶対に吹かない。

……ということは、

『ほら、すぐそこだよ、そこ』

赤坂先生の頭の中に響く声。テレパシーなんか一方的に使われても困るんだが。だけどよかった。

確かに俺の目の前には、丁寧にこちらへ向けられた用紙、ペン、印鑑があった。

「……めんどくさがり過ぎですよ」

『仕方ねえーわ、これは』

そして、また寝息を立てはじめる赤坂先生。

今度は何故かためらう気は無かった。ためらってまた何か超能力を使われるとしたら、次の標的は絶対に俺だからな……。

書き終えて、赤坂先生を起こす。たった5分程度の作業だったのだ。

「先生！起きて下さい！」

『……うるっせえなあ』

不機嫌らしい先生は、なんだか目が虚ろだ。

「部室ってどこですかね？まだ聞いてなかったんで」

部活で最も重要なもの。

それは場所だ。

恵まれた環境じゃないと、出来ることも出来ない。

『部室？……………第18談話室が空いてる』

「……………第18談話室？」

『高二なのに知らないのか？情けないな』

今まで行ったことない部屋なんか知る訳ねえよ。

『お前らが勉強してる1棟あんだろ？あそこから本棟通って部室棟へ行って、5階の3番目辺りの部屋』

ああ！隣か！

……しかしよく覚えてるものだな、超能力ってのは。んで、場所は決まった。

あとは行くだけか。

「じゃ、分かりました。いろいろありが」 『待て！私も行く』

な……なんだと……！

《私も行く》だと……！

あのめんどくさがり屋で授業は全部職員室からテレパシーでやる赤坂先生が…… たかが部室を見に行くために動くだと……！

「昔なんかあつたんですか？第18談話室って」

『いや、私のプライベートルームになっている。だから少し物が散らかっているな』

なんだよそれ。期待したら損しか無かったじゃんか。

つまり、俺はこのダメ美人数学教師に弄ばれて、部室の清掃を任せられたってことか。なかなか自分を恨む。

「と、とりあえず行きましょうか？」

『待て待て。そう焦るな。私は職員室から3ヶ月くらい出てないから…… 足が…… がくがくしてっ……』

もうダメだこりゃ。

結局10分頑張っても立てなかったので、俺がおんぶをすることになってしまった。周りからの目も去ることながら、階段が異常にづらい。

「……し、瞬間移動とか、出来ないんですか？」

『その手があったか』

「え!？」

だが驚くと同時に背中から重みが消える。

今は部室棟入口。俺の努力は一体なんだったのか。

無駄に絶望しながら、部室棟へ入る。とつと第18談話室を見つけ、ノックをすると……

『は、入るなっ!絶対入るな!』

いきなり大声でテレパシー使われてびっくりした。

なにやら焦ってるようだ。足も使えないから今頃へばってるんだろう。

「手伝いますよ?」

『あああ!だめ!だめ!』

何故そこまで拒否るんだろう?何も考えずに開けると、そこには白衣を着た生徒がいた。

ぐっちゃぐちゃのゴミ屋敷の中にちよこんと座っているちっこくて可愛い女の子。着てる白衣もだぶだぶで、まるで人形のように。

目をくりくりさせ、こちらを凝視してくるその仕種は、女豹以外の

何物でもないっていうくらい強力だ。

「あ、あれ？ここ第18談話室だね？」

思い返せば、さっきの赤坂先生の声、やけに高かったような……？
ここでテレパシーが入る。

『……お前殺されたいか！？目の前にいるのは……』

「赤坂美月大先生だこのやろおお！」

……えええええ！？同じ声！？

いや可能性としてはありましたよ？けどどわざわざな……ねえ……

「というか飛びつかないで下さいよー！」

『私だつてなんでこうなつたか分かったもんじゃねえーんだよー！』

目の前のちっこい赤坂先生は、涙目になりながら俺に向かって猪突
猛進……っていうか、猛進してないし。

『……もしや、瞬間移動の時にちよつとミスったあれが……だつた
らもとに戻れねえじゃねえか！前の服がぶかぶかじゃどーしてくれ
んじゃおんどりゃああ！』

なんか激昂されちまつたが、今のところ怖くない。
テレパシーしか使わなさそうだし、浮いてもないし。

「ま、まあ落ち着いて。部屋ぐっちゃぐちゃじゃないですか！なん

かいかがわしいゲームばかりですけど……」

『いかかわしくない！健全な、恋愛と保健体育の勉強にもなるゲームだ！』

周りには、なんか女の子がぁんなことやらこゝんなことをしちゃうゲームが積まれていた。

「どれどれ……／（・・）／」

『やつ、止める恥ずかしいだろ！（〃A〃）』

「ノリいいすね（^・ー・^）」

『なぜどやった（？ー？）』

「ぬるぽ」「ガッ」

もうダメだこの人。改めて実感。ゲームの数も1000は越えてるし。

『……で、どついう部活なんだ？』

……え？

「書きましたよ……？」

『とつくのとうに提出済みだ。時間を止めるくらいなんてことはない』

提出するのはいいから読んどけよ！

「……辛口情報評会です」

辛口情報評会、英語で書くと、ニュース・ペーパー。辛口っていうのは、論評じゃなくて、つい笑っちゃうブラックジョーク、ブラックニュースのことだ。だからペツパー……自分のセンスの無さに脱帽する。

『よく分からんが……まあそーゆーもんなんだろう。テレビとパソコンならこの部屋に3台ずつある。PSSなら3台ある!』

「どーゆー部屋だ……。学校にあるとは思えないな」

『何か言ったか?部長の坂崎廉くん?』

嫌みか。テレパシーで言うことじゃないな。

「嫌みを言つな!じゃあ顧問の赤坂美月さん?俺はあんたを高一として扱うからな!」

『面白そうだな、受けてたとう!めんどくさいのはつまらないからだからだ、面白い事はむしろやりたい』

「この部活相当つまんないと思うけど」

『やることがないよりはマシだ』

「同僚と遊びに行ったりするほうが良いんじゃない?」

『遊びに行けるような仲の人がいないんだ!』

「.....」

「（「」）」

『……最初の活動は新入部員勧誘だな』

少しの沈黙の後、ボソツとテレパシーされた。まず部活で沈黙が起きるっていうのがダメだろう。

それには賛成出来る。

だがしかし、

自分で言っておきながら、

《ボソツとテレパシー》

……それって……なんだ？とも考えている。

「チラシの掲載とか？」

『そうだな。新入部員はどういう人がいいんだ？』

『どういう人……？』

そーいえば全く考えてなかった。

明るいとか、優しいとか？じゃないよな……。

「どういう人っていうのはないな。パソコンに何かそういうチラシ作るソフトある？ないかな？」

『……………』

返事が無いので振り返ってみると、なんだか不服そうな顔をしている赤坂先……美月。

「どうかしたん？」

『本当に高一扱いか？チラシを作るソフトなんて教師が持っていない訳無いだろうが！』

……あつ、そりやそうか。ここは仕事場みたいだし。つーか、この人は本当にさつき俺が訪ねた赤坂美月なのか？身長が20センチくらい縮んでる。

そりや敬語使うのも忘れるし、使いたくねーし……。

「で、決まり文句とかって考えとかないと……」

『そついうのは坂崎の仕事だろう！私は明日の小テストの問題を作らなければいけないのだ！』

お、伝説の鬼畜テストか。いくら勉強しても30点中20点取れないテストはどうやって作ってるんだか。気になるな。だけど、今俺を呼び捨てにしたな？高一なのに。

「坂崎先輩、な？」

けらけらと笑う俺。不満から呆れ顔へ移った美月は、

『……ふん。そこまで私を虐めたいのか？なら呼んでやろう。出来る限り人間的に後悔するようにな』

つまんないからふざけてやろうと思ったんだらうか。プライドのかけらもないことを言いはじめてきた。とりあえず聞いてやろう。

「口で言ってみれば？」

『そうさせてもらおうか』

喉に手を当て、ちょっと押したあと、

「あーあー。あー、あー」

発声を始めた。どうやらもう何ヶ月も声を出してないらしく、さっきの大先生ってやつが久しぶりらしい。

「さ……さ……ささ……さ、坂崎先輩。ど、どうか……その……チ
ラシを……」

……なんか死に際みたい。

可愛さのへったくれもないややカラカラした声だ。

『今良からぬことを思っただろう？』

声を出し、やや疲れたよオーラを出している美月は、何故か汗を流している。

喋るってそんなカロリー使うのか？

「いやゝ？そんなこと微塵も思っていないけど？」

もちろん思いましたがね、ええ、ハイ。

『まあいい……で、坂崎の個性と能力とは……なんだ？考えても思
い付かん』

「教える価値もないよ」

いや、俺が教えたくないだけだ。教えたら教えたで色々言われるし、利用されたくない。

「……まあ、数学には関係しないかな？」

『そうか……チラシはどういうものにする？』

やっと本題に戻った。

なんかホツとする。

「イラストっていうのはどうかな？」

『画才はない。なにせもう何年もペンを握ってないからな』

こいつ本当に教師がちっこくなつたやつか！？

ペンくらい握ってるだろ！……そこまで超能力だとさすがに引く。

俺が愕然としたのが顔に出てるらしく、それを見て不思議がる美月。いや不思議がるなよ。

当たり前だから普通に。

『坂崎も』『先輩だから』『うるさい！坂崎……先輩……も！去年の美術の評価10点中6点だっただろ！把握してるんだぞ……あーんな成績、こーんな成績』

でもやっぱりこいつは赤坂美月だった。俺の成績は美術の先生と担任以外誰も知らないはずだからだ。

寮に住んでるから親はいないし、友達も、あまり……友達はいいから、教えるやつはいない。そんなこたあどおでもいい。

「……じゃチラシは文にすつかあ。新聞的なデザインがいいかな」

『ほお……？デザインに関してはまだ少しやり手のようだな？』

いや誰でも思いつくからねこんくらいなら。

「新聞だつたら写真が必要だな」

『私は絶対写らないぞ？こんな……恥ずかしい姿で写れる訳がないだろう！ちつさくて、大好きな胸まで……小さくなった……』

「そんなこと言われたってなあ……原因がわかんないんだからどうしようもないしなあ……」

……アレ？

今俺スルーしたけど……

《大好きな胸》？

なんだかよくわからんが、美月は顔を赤らめはじめている。失敗してまづいなくて時の顔もしている。もしや……

「……美月」

『は、はい？何か？』

「いや、百合女！」

胸が好きってことは、つまりは女の子が好きってことだろ？つまり、百合だな。

こーゆー結論に至るのは、能力のせいであって……。俺の能力は、

自覚はないんだが、恐らく

《全ての聞いたことから理屈を付けて推論が出来る》
程度の能力だ。

つまりは推理と同じだけど、全ての事象から高確率で合っている推論を引つ張り出せるってことだな。

俺はもともとニュースやブラックユーモア、後はゴシップネタやネットサーフィンなんかが大好きで、

その方面には自他共に認められる知識がある。それが俺の《個性》だった。

そこから次第に、我が

《ナレッジ・ベース》からの高精度な推論を引つ張り出せる《能力》になった。

だけど、

まさか赤坂先生が瞬間移動したらちっこくなるのは……さすがに予想できなかったし想像もつかなかった。

あの時、美月に能力を言いたくなかったのは、それに関して、かなりの文句を言われそうだったから。

んで、そんな重大な説明をしてる間にも会話は勝手に進行している。

『なっ……百合ではない！女の子を愛でてるだけだ！決して手なんか出してないからな！』

だからそれが百合なんだ。手出してたら怖いわ！

と、いう訳で、

物的証拠れっつらごー！

「さっきのエロゲのパッケージにさ？なんか、

《女の子になっちゃった》っていうネタ多くなかった？」

『……負けました（-_-）』

……あつさり勝った。
超能力者の弱みゲット！

「じゃ、写真でも」『それとこれとは話が別だあ！』

だが、まだ写真は撮らせて貰えない。
まだ食いつくのか美月よ。かくなる上は……。

「ふ〜ん、じゃ、今の話はリリア先生に《今から》言ってきますね。
」『ち、ちよつと待ってくれ！』

リリア先生は、外人だけど日本語が異様に話せて、かつ、綺麗な女の美術の先生兼ネイティブの先生だ。
いくら同僚に友人がいないからって、百合の人があの人を放っておくはずがあるわけがない。
実際、若干涙目になりながら美月は俺を止めた。

『リ……リリアさんだけには……』

「じゃ写真撮ろうか」

『はい……』

「カメラは……あつた」

最新式のデジタルカメラだ。何故にこんな部屋に？
写真も撮らない人が？
……こんな時能力が働く。

「写真も撮らないのに、リリア先生の写真でも入ってんの？」

『や、やめろおお！』

「……プッ。やっぱりそうだ！」

中にはリリア先生のスカートの中とか、着替えのシーンとか、中にはリリア先生の家と思わしき部屋で美月が裸でリリア先生を襲っている動画まで……

もちろん、全部盗撮みたいだし。なにをやってたかうちの顧問は。

『（＼＼）ああ……恥ずかしいのに……むずむずしてきた……気持ちいい……』

しかも露出癖まであったようちの顧問は！

「じ、じゃ写真撮るから」

『……あ、そ、そうだな。ここらへんならエロゲ見えないよな』

美月がスタンバイしたところで、テレビをつけてニュースにし、カメラタイマーを入れる。

「おっしや！」

『早くしないか！』

ぐちゃぐちゃした部屋を問答無用で突っ走り、何かがバキッっていう音も無視。

とりあえず写ろうとした。

「俺は……部長だッ！」

が、直前で何かにつまずき、無音で切られたシャッターの奥には、部長がカメラも気にせず可憐な女の子に飛びつこうとする光景がはつきりと写っていた……。

次の日、4月18日。

俺が第18談話室に向かうと、やっぱりか。

制服を着た美月がいた。さすがに今までの白衣はまずいと思ったんだろっか。

「にちは……って、全然片付いてないじゃん！」

『《にちは》とはなんだ！《にちは》とは！』

「こん《にちは》の略！つか片付けろ！今日からは新入部員も来るかもしれないんだから！」

『来るわけ無いだろ』

「まあそりゃそうだけど……で、チラシは？まさか」

『もう朝に晒したお』

「晒したおって言うなや」

今日もこんな調子か……。早く新入部員来ないかな。この雰囲気はまずい。オワタどころの騒ぎじゃない。

「んで？反応は？」

『顧問が私という時点でもうだめだ。今日は来ないな……ふあ……私は少し寝る……』

そして、愛用アイマスクを目に当てる美月。

「……なんだかなあ」

そんな時だった。

コンコン

ノックの音がした。

「え！？あ、はいはい」

ドアを開けると、バックと紙を持った女の子だった。新入部員キタ

ー！

「……部活に入りに来た私は、書類を提出しなければならないことに気付く」

？

……今なんか……あれ？

「入部届です」

差し出されたのは入部届。別に変わったところはない。細呂木雪見さん……ねえ。

「細呂木雪見です。高二です。よろしくお願いいたします」

礼儀は正しいし、普通に良いとは思うけど……口調がさっき変だった

たな。

「口調に関しては仕方ありません。こういうもので独り言になるとあんな感じになっちゃうんです」

少し照れながらカミングアウトした細呂木雪見さん。俺は彼女を、速攻で可愛いと思った。綺麗な体。凜とした目、青い髪……。

「……照れますよ、そんな事考えられてたら……」

……なんで考えてることが全部ばれてるんだ!?

恥ずかしいどころの騒ぎじゃない。やましい妄想さえ出来ないじゃないか!

もしや……能力?

「あの……なんで」「正解ですッ!」

!?

……びつくりした……。

「やっぱり心読めんの?」

「ええ、昔から読書しては感想文ばかり書いてましたから。それが能力になってしまっただけ」

苦笑する可愛い細呂木さん。垂れ目に眼鏡はやはり最強だったんだな。

「細呂木さんじゃなくて、『雪見』をお願いします」

そんな事を言われたので、雪見って呼んであげよう。というか、一応自己紹介と、あと顧問である美月を紹介しなくては。

「俺は坂崎、坂崎廉。坂崎でいいよ……雪見、顧問を紹介させてくれ」

「なんだろう。このドキがムネムネする感触は……。これが名前で呼ばれた時の……いや恋なのだろうか。私にはよく分からない」

俺が名前を呼んだ瞬間に、身を翻してぶつぶつと……どうやら独り言らしいが、内容からして妄想なのは目に見えている。

「あの……」

「確かにこの目の前の男の人はかつこいい。私には高嶺の花だ。今、私はこの人に話し掛けられ、何を言っているのか分からなくなっていた」

俺をかつこいいと思ってくれるのはいいがなあ……、妄想が……酷い……。

全部口から出てるし……。

また新たにこんな強力なキャラが入るのか……。

「顧問を紹介させてくれない？」

少し強めに言うと、雪見ははっとしたようで、慌てふためき、

「え？あ？はっ！？す、すみません！顧問は……赤坂美月先生ですよ？いらっしやらないようですが……」

周りをキョロキョロと見渡す。だが見つからない。

美月が見えないのは当然だな。今美月はプリントの山を布団代わりに寝ている。んで、顔以外は何も見えないし、目線の高さの問題も少々……。

「ゴメン今起こすから」

俺はすかさずプリント山方面へ歩き、

「美月〜、美月〜！」

呼び捨てで声をかけるが、へんじがない、ただのしかばねのようだ。

「むにゃ……ふにゃ……」

正確には屍ではなかったんだが。

「新入部員だぞ〜！」

「……ふにゅらあ……」

ホントに平和に眠ってんなこの人は！ちくしょおアイマスク引っぱかしたら可愛いじゃねえか！

「こんなに可愛いんですね赤坂先生って♪初めてお目にかかりました♪」

こっちに來た雪見も納得の可愛さ。
初対面にしては……だな。という訳で、美月には少し性癖を披露してもらって、雪見にはドン引きしてもらいますか。

「雪見、今から起こすから、出来る限り可愛く嬌声を発して」

「き、嬌声？喘ぐってことですか？」

当惑するのは当たり前だ、何故女の子を起こすのに女の子の声が必要かはわかる訳が無い。だが、今回の作戦にはガチで必要不可欠。つまり、美月は寝てても女の子の声を聞いたら速攻で起きるはずという原理。

で、赤坂先生が百合だったなんてえ〜！みたいな？

でもやっぱり女の子にそんないきなり喘げって言うのは失礼だ。

「俺の後ろで、鳴きな」

と、いうわけで。

少し妄想力を貸してもらうぜ雪見さんよ。

「……なんだこの女子をドキドキさせる台詞は。私の好みをもそのまま体言しているかのようである……まさかイケメンにこんな事を言われる日が来るとは、今までそんな事は考えたこともなかった。しかし今、現実を起こってしまった。ありがとう今まで私を支えてくれた人達よ、そして、私はこれから新たな人生を歩もうとしている」

……ホントにその独り言すごいな。かなり声もでかいし。妄想垂れ流しだし。

「じゃ、鳴いて」

「は、はいっ！実際にしましょうか！？なんだか体が火照ってきてましたし……」

頼つぺたを真つ赤に染め、シャツに手をかけた雪見。このままどやりかねるので流石に止めよう。

「いやそれはいいから。流石に俺はそんな趣味じゃないからさ」

だが、1度入った妄想スイッチはそう簡単には切れるはずもない。

「いきなり本番派ですか……なるほど……」

「……何考えてんの!？」

「いえ、その……坂崎さんが夫になったら……子供が沢山できたらいいなって思っていました……」

もうダメだこいつ酷すぎるだろ……。

俺と結婚して子供作る妄想って……想像したらすごいなコレ。

「……うゝんむにゃ……んん?」

まずい、こんな騒がしいと美月が起きる。

「とつ、とりあえず!とりあえずなんか鳴け!」

なんか人間的に間違ってる気もしないでもないが、作戦が失敗するよりは!

「に、にゃ」

そつちじゃねえええ!

「わんっ！うゝわんっ！」

そっという方向性じゃねえ！

「あっ！だめっそこはっ！いやっきちゃっつよおっ！」

『……坂崎お前何調教してるんだ！？』

「「あ」「

後ろには、

『てめーらニヤンとかワンとかうるせーんだよちったあ黙っとけや』
と言いたそうな美月……ではなく、俺に《にゃーん》ってしようとした眼鏡の女の子に対する驚きで、

『何坂崎お前そーゆー趣味だったの？なんだよ同朋じゃねーかオイ。今度一緒に飲まねーか』

と言いたそうな美月が。

オワタ……。

『で、私を陥れようとしたと……』

結局、ばれた。

あのあと呆気なく超能力の餌食になった俺は、目の前で実験用の力リガラスのビーカーを30個程割られ、怖くなって全部喋ってしまった。能力の事も。

「でも……現実だしさあ」

縄で縛られた俺と雪見を見下すように見ている美月にあえてタメ口つていう！

美月は少しまだむっとしているようだが、

『まあ不問にしてやろう。……細呂木雪見』

俺はなんとか許しを得て、縄は解かれた。
が……

「は、はい。私も調子乗ってました……すいませんでした……ふええ……」

雪見はまだ話がこれから。縄で縛られ、怯えている。ついに泣き出しはじめてしまいそう。だが、俺の心配はそこじゃなかった。

『……ハア。細呂木、お前私を悩殺するつもりか！？』

ほらきた美月の性癖。

なんかもう喉から手が出そうになってんぞ。
手が震えて今にも飛び掛かりそうだぞ。

「……ふえ？」『動作の1つ1つが異常に可愛いではないか！眼鏡を取れ！私は眼鏡は専門外なんだ！』

「え？ちよつと……いやつやめてえつ……」

ちよつと抵抗するものの、眼鏡を奪われる雪見。

「眼鏡返して下さい！何も見えないんです！せめてコンタクトを……」

……あれ？おかしいなずいぶん可愛く……異常な可愛いさだ、あれ本気じゃなかったんですねわかります。

「返してください！先生の精神崩壊させますよ！本当ですからね！」

『うふ♪うふ♪虐めなくなるねえ♪』

にたにたし始め、ついに手が伸びはじめる美月。

「ぎゃあああ！あ、赤坂先生やめてえ！」

「……俺帰っていい？」

「坂崎さん見捨てないで下さいよぉ！」

泣きじゃくりかけ、いや、もう泣きじゃくっている雪見。

『あはゝもつと鳴いていいんだよ？いい声聞かせて！赤坂先生に聞かせて〜！』

スイッチが入った美月。

もうかっぱえびさんの如く止められない止まらない。

「まだっ！あの……そこにあるコスプレとかで勘弁してくださいっ
！」

抵抗への最後の手段だと、コスプレを希望し……

「え」『……いいの？』

雪見が、縄に結ばれているなりに指をさした先にあったのは、なんかアニメで見たことあるような気がしなくてもない紺の防弾制服。かなりスカート短めで……って、

「オイ美月！なんでこんなコスプレグッズが沢山あるんだよ！」

見渡せば！

ロッカーの中は全部そんなばっかだし、カツラとかありそうだし
つつかあるし……

『何？決まっているだろう！現実逃避のための愉快的パートナー達
だ！』

……そっか、ちっこくなる前はコスプレマニアだったんか、よく分
かります。

だからちっこくなつた時に服が着れないってキレてたのか、よく分かります。

『だが……ちっこくなつたから』『いや理由は分かつたが……雪見、本気?』

「この緋アリの制服もいいのだが、A B ものもハイクオリティにまとまっている。しかしこれらを手に入れるためには赤坂を平伏させなければならぬ。私は作戦を考えることにした」

……どうやら本気っぽい。やる気はみなぎってそう。目を細め、遠くから一生懸命そんなものを見ようとしている。

「本気がよ……」

『なら今度これを着て秋葉原に行こうではないか? 楽しいぞ?』

しかもこの顧問はこれを着て秋葉原へ行ったことがあるらしい……
どんだけ性癖兼ね備えてんだよ。

「だったらこの縄解いて下さい! 敬意無くして先生って呼ばなくなりますよ?」

『それは……まあ部員だから良しとしよう』

「縄を解く気は無いんですね……だったら私にも策があります」

若干ブラックな口調で、美月に迫る雪見。

『なんだ? 言ってみろ』

精神力は高そうな美月を、どういう方法で話術だけで蹴落とすのか。読書家としての腕がなるのか、若干楽しそうにしている雪見。

「秘密をばらすんです。私には心が読めますから」

……そうだ、この人は心が読めるんだった。だからって秘密を探れんのか？

うゝむ、出来るのか……？

『どんなだ？いくら心が読めるからとはいえ、そんな秘密は分かりやしないぞ』

あくまで強気な美月。

ここからはドラクエ風に。

……ゆきみのこうげき！

「では言いますよ？私が知った弱みは、実は赤坂先生は処」『分かりましたホントすいませんでしただから言わないで』

かいしんのいちげき！

みつきにはかりしれない

せいしんダメージ！

みつきをしょげせた！

ゆきみは（部活内の）ちいがあがった！

……早っ！美月はただけ処をブライバシーだそうだ気にしてんだよ！
っ！かそれを見つけたお前もお前だなオイ。

「坂崎さん、私には心の奥底に秘められたトラウマまで全部読めるんですから。見直してみてくださいね」――（・・・）＜キラッ＞

なるほど、最初からコスプレグッズを手に入れるために心を読んで有利な展開に持ち込んだのか。腹黒い……って……あれ？

雪見ってこんなだっけ？まだ会って2時間くらいしか経ってないけど、明らかに俺とは接し方が違うし、なんか顔文字使ってるし、最初と比べるとずいぶん腹黒く行動してるし。なんつか、雪見は美月を敵みたいない目で見ています。当たり前っちゃ当たり前なんだが……顧問と部員が仲悪かったら終わりじゃね？

「さて、やっと眼鏡も取り戻しましたし。着ます？」

「俺はいいよ」

美月をものの数秒でくたばらせた雪見は、眼鏡を取り戻し、コスプレロッカーの前へ来ていた。

「自分が着るかは自分で判断してくれ。あとこのへばった美月をどうにかしてくれないか？」

『私は……処女だ……私は……恋愛歴……0だ……。うっ……私は……』

美月といえば、自分のパソコンに突っ伏してテレパシーと同じ文章を打ち込み続けている。

周りから見たら、病気だ。

「ハハ、坂崎さん冗談は止してください。私にナメック語は話せませんよ」

雪見は本当に美月を嫌ったらしく、チャンスがあれば精神力を削ぎ落とそうとする。

しかもどれもグサツってきそうなキツイ言葉達だ。

『胸が大きいと赤坂先生みたいに心も広いんですよ、例外はいますか』

とか、

『赤坂先生の昔のブラおつきいですね、今はどうですか？入ります？』

とか。

特に胸がちつさいことをいじられつづけた美月。

ナメック語が決め手となり、ついに崩れさる美月のプライド。

『……もう……だめぽ……（´A`）』

がちで精神崩壊のカウントダウンが始まりそうなくらいの圧倒的精神攻撃。

雪見こいつ、心が読めてかつそれを利用した精神攻撃まで出来るなんて……。

ドSだ、超弩級のドSだ。間違いない。

敬語の人はドSなんだ。

「坂崎さん！どれがいいと思います？やっぱり私はジャンヌになりたいです！」

そんなドSな雪見は、え〜と、銀髪のかつらをかぶって、さっきの制服をあてている。

「ああ……まあ……いいんじゃない？」

あいまいな返答をしたが、正直可愛い。垂れ眼鏡は変わらないが、それっぽくはなると思う。とりあえず着てみたら？
っていうね。

「もう着ましたよ？」

……おお、さっきの垂れ眼鏡とは違う、確かにジャンヌだ、なんかそれっぽい。

「……クオリティは高いんじゃない？」

「よかった〜……これで気持ち悪いとか言われたらもうどうすればいいのか」

今の雪見を見て気持ち悪いなんて誰が言つのやら。

「そこまで言われるとなんだか恥ずかしいですね……だが、まただドキドキする感触がまた私を襲う」

「ジャンヌ又可愛いよジャンヌ」

「えっ……ええつと……私は……その、細呂木雪見ですから、ジャンヌではないんですけれども、でもやはり可愛いと言われると嬉しくなるのは女の性というもののなのか、分からない」

妄想と会話が入り乱れてめちゃくちゃわかりにくい文章になってるっていうのは言わないであげよう。

「次は何を着てみよう」

んで次の服を選び出す雪見ジャンヌ。

「やっぱりガンチラさせたら?」「は、はしたないです坂崎さんまで!」「……2人で何いちやいちやしているんだ」

「……復活するの早いですね貧乳協会会長さん?」

そんな時に、さっきほど威張ってはいないが、美月が復活した。

『もう慣れたからな。ああして反復させて体に叩き込むのが結局1番だ』

あんなナイフみたいな言葉に慣れたも何もあるのかは疑問だが、とりあえず大丈夫らしい。そこは超能力とかじゃなく、根気のはず。

『心の壁なら構築済みだ。超能力とは便利なものだ。心の壁まで作れる』

オイさっきの俺の発言返せ。つーかなんだよ心の壁って。

「……とりあえず、先生なりに対策はしてますね。まあ甘々ですけ

ど」

そして、まだ悪態をつく雪見。この2人の目線の間に光る火花の多さが異常な件について。

『……今回の悪ふざけは不問だ。入部は認めてやろう。だが、毒舌は封印だ』

「毒舌？違いますよ常識ですよ」『そのことだ！』

「じゃあ、コスプレグッズ気に入ったんで着てもいいですか？あと週末に秋葉原行きますよ」

『いいだろう、私が手取り足取り教えてやる。いろいろと買うものもあるしな』

……あれ、意外と？まだ陰悪でもない？そして俺が省かれている気がしないでもない。

「あの……俺は」『もちろん秋葉原には来るよな？』「坂崎さんは特別ですから来ますよね」

……ですよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8111x/>

ニュース・ペッパー

2011年10月26日08時05分発行